

大阪教育大学紀要
第Ⅱ部門 社会科学
生活科学
第51巻 第1号
(平成14年9月)

MEMOIRS OF OSAKA
KYOIKU UNIVERSITY
Ser. II Social Science and
Home Economics
Vol.51 No.1
(September 2002)

統語的単位の開放性と参与の組織化 (2)
—引き取りにおける参与の交渉—

くし だ しゅう や
串 田 秀 也

社会科教育講座

統語的単位の開放性と参与の組織化(2) —引き取りにおける参与の交渉—

くし だ しゅう や
串 田 秀 也

社会科教育講座

(平成14年3月28日 受付)

本稿では前稿[串田2002]に引き続き、会話中の「引き取り」という現象を分析することによって、従来のコミュニケーション論の二つの想定(話し手による発話の「占有」、伝達の道具としての発話)の一面性をあきらかにする。前稿では会話の中で統語的単位がしばしば開放性を帯びることを示したが、本稿では、これを契機として生じる統語的単位への参与の交渉過程を分析し、それを可能にしている参与役割の配置転換の装置系を析出する。

キーワード：会話分析，語用論，引き取り，参与

I 引き取りと参与役割

引き取りは、引き取られ手の側からさまざまに異なった扱いを受ける。引き取られた者は、あるときは引き取り発話とオーバーラップして自ら異なる発話を完了させ、あるときは引き取り発話をほぼユニゾンし、またあるときは引き取り発話が終わるのを待ってそれを承認したり、承認することなしに自分の発話を続けたりする。では、これらのさまざまな引き取りの取り扱いには、何か記述可能な論理があるのだろうか。

アンタキたちはこうした取り扱いの多様性を解明する鍵をゴッフマンに由来する「footing=参与役割」の問題に求めた。彼らによれば、引き取りのあとで引き取られ手が行う反応は、引き取り発話が参与役割に関して自分のももとの発話に「忠実に」差し出されているかどうかによって照準したものである[Antaki et.al. 1996]¹⁾。本研究も彼らと同様、引き取りのあとで生じる取り扱いを記述する上で、参与役割という考え方が重要であると考える。そこでまず、この考え方について最小限の整理をしておく。

ゴッフマンは、従来のコミュニケーション論において「話し手」「聞き手」という概念が単純化されて理解されてきたことを「footing」論において説得的に示した[Goffman 1981]。このうち、ここで直接関係するのは「話し手」概念の方である。「話し手」という概念には「責任主体=言葉によって立場が打ちたてられる者」「著者=言葉を選択した者」「発声者=音声を発した者」といった参与役割の区別が必要であり、これらを合わせて発話の「産出フォーマット」と呼ぶ。レビンソンはさらに、これらの区別を析出する基本的成分として「当該場面に参加しているかどうか」「メッセージを伝える動機を持つかどうか」「メッセージに形式を与えたかどうか」「メッセージを伝送したかどうか」の4つを立て、それらの組み合わせとして16種類の参与役割を体系的に区別することを試みている[Levinson 1988]。

われわれは前稿において、「理解の表示・チェック」「共同追加想起の促し」「現場コメン

ト」「共通経験報告」「共同説明」「追加説明」という6つの典型的なシークエンス環境を析出した。本稿ではまず、参与役割という考え方を援用して、これらのシークエンス環境を整理してみよう。

まず、「理解の表示・チェック」というシークエンス環境は、引き取り手が「著者」という役割から引き取られ手の発話をモニターすることを適切にする環境である。なぜなら、理解が表示されたりチェックされたりするとき行われているのは、もともと引き取り手が発した言葉に対して何らかの操作（反復、言い直しなど）を行うことだからだ。

次に、引き取り手が「共に知る者」という立場を占める4つのシークエンス環境（「共同追加想起の促し」「現場コメント」「共通経験報告」「共同説明」）は、引き取られ手の発話を引き取り手が「もうひとりの責任主体」という役割からモニターすることを適切にする。なぜなら、引き取り手はすでに先行文脈で「同じ出来事に共に参与した」「同じ類型的経験を持つ」といった共通の成員性を示しており、引き取られ手の発話を「われわれのうちの一人の発話」と見なすことで、自分自身も「それによって立場がうち立てられる者」の一人と見なしうるからである。これら二種類のシークエンス環境では、こうして、引き取り手に、産出フォーマットのある部分を分担する者としてふるまう可能性が用意されている。

これらに対し、「追加説明」は性格が異なる。ここでは、引き取り手が引き取られ手の発話の産出フォーマットを分担し得るような足がかりは先行文脈で示されていない。このとき引き取り手は、さしあたり「純粋な話しかけられた聞き手」である。しかしながら、説明が追加的に組織されていることによって、引き取り手はその説明を全く新奇な情報としてではない形でモニターすることが可能である。このことは、引き取られ手が説明に用いる言葉が、すでにある程度引き取られ手の手を離れており、いくぶん「引用的」ないし「汎人称的」なものとしてモニターされることを意味するのではないかと思われる²¹。つまり「追加説明」の場合、引き取り手の側に産出フォーマットへの足がかりはないが、逆に引き取られ手の「著者性」にある種の「緩み」ないし「二重性」が観察されているのだと考えられる。

この視点をさらに敷衍すれば、ラーナーが見いだした二種類の契機、すなわち予測可能性と進行性の滞りは、それぞれ引き取られ手の側における「著者性の緩みないし二重性」および「発声者性の緩みないし二重性」と読み換えることができる。こうして、われわれは参与役割という考え方を援用することで、産出中のターン構成単位が「開放性」を帯びるさまざまなあり方を区別することができる。

しかしながら、以下に示すように、これらのシークエンス環境がもたらす配置は、引き取りがひとたび開始されると配置転換の可能性にさらされる。たとえば、「もうひとりの責任主体」とか「著者」という立場からモニターしていた聞き手が行う引き取りだからといって、その引き取り発話ががまさにそのような参与役割を相手から認定されるとは限らないのである。引き取りがひとたび開始されると、そこには一連の複雑な参与役割をめぐる交渉の可能性が生じる。このような参与役割の配置転換の可能性こそ、この現象がコンテキストの接ぎ木の一例であることの中心的意味である。本稿の課題は、この交渉＝接ぎ木に用いられる手続きを一つずつ分離することによって、この交渉＝接ぎ木の論理を明らかにすることである。

II 発話の時間的整序と発声者性：「うん」「そう」受けの位置

手元のデータ群を概観して気づくことは、かなり多くのケースにおいて引き取りのあとに「うん」および「そう」という標識が用いられていることである。これらの標識は何らかの意味で相手の発話を承認していると思われるが、何がどのように承認されているのか。まずこの問いから、引き取りをめぐる複雑な参与の交渉に分け入っていきたい。

この問題を考えるうえでまず注目すべきは、これらの標識が引き取られ手によって用いられるのみならず、引き取り手によっても用いられることがあるという事実である。私のデータ群には、次のような4通りのパターンのすべてが見られる。なお、以下でデータを提示するときには、すべて「引き取られた者」をB、「引き取った者」をAとし、「引き取られた発話」には「→」, 「引き取り発話」には「⇒」を付す。また、そのときどきの分析で注目する部分に下線を引く。

A. 引き取られ手の「そう」受け

【来る直前だもんね (Y I)】

→ 2 B : そうだって (.) あたしあれやったのさー (0.6)

⇒ 3 A : 来る直前だもんね

4 B : そうそうそう (0.7) このー (0.7) あと (0.4) ぐらい？

B. 引き取られ手の「うん」受け

【食べちゃったねー (SK)】

→ 5 B : 結局このトマトほとんど (0.4) 食べたねー うん (0.7) まるまる

⇒ 6 A : 食べちゃったねー

C. 引き取り手の「そう」受け

【うんきせ (SK)】

→ 9 B : ちょうどえんどうえんどう豆のねー 出始めてねー うん

⇒ 10 A : うんきせ (.) そうそう そう 一番おいしいとき
やったねー

D. 引き取り手の「うん」受け

【食べれなくなる (Y I)】

→ 9 B : あたしも入んないよストレスーが

→ 10 (0.5) たまるーとぜんぜん (.) ごはんなんぞいらん

⇒ 11 A : 食べれなくなる (.) うん

引き取り手がこれらの承認の標識を用いることもあるということは、まず、参与をめぐる交渉を「引き取られ手による引き取り発話の承認／拒否」だけで考えているアンタキたちの視点が一面的であることを端的に示している。では、われわれはこのようなヴァリエーションをどう考えたいだろうか。両者がともに「うん」「そう」といった標識を用いるとすれば、それぞれの場合に、「どちらがこれらの標識を用いて相手の発話を承認するか」はどのようにして選択されるのだろうか。

上にあげた4つのケースには、一つだけ明白な共通性がある。それは、引き取りが開始されて以降の発話産出において、先に発話をやめた方の者がこれらの標識を用いているということである。この規則性は、この4ケースだけでなく、私の手元にある引き取りケースのすべてに例外なく当てはまる。

オーヴァーラップに関する詳細な研究で知られるジェファーソンは、これとよく似たことを観察している。彼女によれば、二人の発話が同時に開始され、二人がオーヴァーラップする形でターンをとった場合、その次のターンをとるのは必ず先に発話をやめた方の者である。このことは、オーヴァーラップした二人の発話の順序に関して「先に発話をやめた方の発話が先だと見なされる」ということだとジェファーソンは解釈する [Jefferson 1973]。つまり私たちは、オーヴァーラップした二つの発話に関して「どちらが先か」を決めるときに、「どちらが先に発話を開始したか」ではなく「どちらが先に発話をやめたか」を参照しているというのである。

この解釈を援用するならば、オーヴァーラップした引き取り部分について、先にやめた方の者が「うん」受けや「そう」受けをすることは、「自分の発話が先であり相手の発話が後である」という時間的順序関係を割り当てる手続きだということになる。つまり、これは何らかの意味で相手の発話を「自分の発話への反応」と見なすことによって、双方の発話に相互行為上の一定の位置を与える手続きなのである。このような手続きがとられるならば、双方の発話は相互行為の進行に対して一定の貢献をしたことが公然化され、オーヴァーラップしたからといってどちらも「なかったこと」にはならない。双方の「声」は聞き届けられたのである。それゆえこれは、引き取りにおいて発話を行った二人の参与者がともに最低限「発声者」として認定される手続きであるといえる。

このような手続きが双方によって利用可能だということは、引き取りをめぐる参与の交渉において、参与者たちが「引き取られたー引き取った」という非対称的な関係に必ずしも拘束されないことを示している。むしろそこには、非対称的なイニシアティブを逆転させる可能性が存在するのである。投企された参与役割の配置が変換されるこのような可能性は、引き取りがコンテキストの接ぎ木の一例であることの具体的意味を構成する。

先に発話をやめた者が「うん」「そう」で受けることにより、双方が「声を発した」ことが認定される。しかし、この捉え方だけでは、どうして二つの異なる形式が存在するのかまでは分からない。これを考えるためには、「うん」受けをする場合と「そう」受けをする場合に系統的な違いがあるかどうかを見なければならぬ。手元のデータ群を概観すると、いくつかの傾向に気づく。

Ⅲ 「そう」「うん」受けに先立つやりとりの特徴

1 「そう」受けに先立つやりとり

本章では「そう」受け「うん」受けに先立つやりとりの特徴を検討する。まずは「そう」

【なんかあったな (YI)】

- 1 B: ああー (.) あ分かんなく [ても (0.5) 「はー」 (.) (……ってから) =
 ⇒ 2 A: うん [なんかあったなって=
 3 B: [= (.) 「あーそーねー」 (みたいな)
 4 A: [=おも うんだろう (.) そうそう (.) 何かあるんかなって思うかもしれ=
 5 C: うんうんうん
 6 A: [=ないけど (.) 基本的には分かんないわけじゃない

以上から、「そう」受けが用いられているケースは次のような傾向を持つとまとめることができる。「そう」受けは、引き取り部分において、まったく発話しなかったか、あるいは、不十分な形でしか発話しなかった者が、引き取りの終了後に用いる手続きである。最後のケースでは、Aは「なんかあったなって思うんだろう」という述部の全体を発話しているが、事後にリサイクルしているということは、それが不十分にしか発話されなかったとA自身が見なしていることを示している。

2 「うん」受けに先立つやりとり

次に「うん」受けに先立つやりとりの特徴を述べよう。第一に、「うん」受けの大多数を占めるのは、B. パターンおよびD. パターンにおいて引き取り部分にオーバーラップが生じており、オーバーラップした2人の発話はそれぞれ完了可能点まで発話されており、かつ両者が内容において酷似している場合である。それぞれ一つずつ例を示す。

【食べちゃったねー (SK)】

- 5 B: 結局このトマトほとんど (0.4) [食べたねー うん (0.7) まるまる
 ⇒ 6 A: [食べちゃったねー

【食べれなくなる (YI)】

- 9 B: あたしも入んないよストレスーが
 → 10 (0.5) たまるーとぜんぜん (.) ごはんなんぞいらん
 ⇒ 11 A: [食べれなくなる (.) うん

第二に、上のいずれかの特徴を欠いているように見える場合、すなわち完了可能点まで発話されていないか、あるいは、内容的に異なると思われる場合にも「うん」受けの例が若干見られる。一つずつ例を示す。【イギリスロック】の場合、Aは内容的にはほぼ同じことを言っているが、発話を中断している。【してるだけ】の場合、Aは完了可能点まで発話しているが内容的にはBの発話と同じとは言い難い。

【イギリスロック (YS)】

- 4 B: ふーん (.) えっんじゃあイギリ (0.5) どっちかっていえば [イギリスのー
 ⇒ 5 A: [イギリスロッ (.) うん (.)
 6 ロックが好き
 7 B: うんあーあ (.) へえー

確認作業にとっては十分な貢献を果たしている。【なんとか法に】は、Bがある法律の名称をさす言葉を探しているときに引き取りが生じている。前稿で述べたように〔申田2002:57-58〕、ここでAの「なんとか法に」という言葉は、両者ともその法律の名称を思い出せないという状況でBの発話を先に進めるための「助け船」として十分な貢献をしている。

以上と同様の視点から、「内容的に異なるように見えるオーバーラップ」の場合も記述できる。先の【してるだけ】において、「してるだけ」と「してるけどごわごわしてる」というオーバーラップした発話は、字義通りに見れば内容的に同じとは言い難い。しかし、ここで行われている活動を考慮に入れた場合、この両者の差異は重要でないことが分かる。前稿で見たように〔申田2002:52〕、ここでは「モロヘイヤはお浸しにしたらおいしくない」ということがB=A夫婦によって共同説明されており、引き取り前の部分では「つるむらさきとか水前寺菜とかはお浸しにしておいしい」ということが述べられている。これらの野菜との対照を踏まえて、ここではモロヘイヤのお浸しが「おいしくない」ことが主張されている。そして、モロヘイヤのお浸しにマイナスの評価を表明するという目的は、「してるだけ」という発話も「してるけどごわごわしてる」という発話と同様に果たしている。

以上から、さしあたりの一般化として次のように述べておきたい。「うん」受けの大多数は、引き取り部分でオーバーラップが生じたときに、そこで当面の実際的的目的にとって十分な発話産出を行った者によって用いられる。「さしあたりの」という理由は、以上のほかに、オーバーラップなしにクリアな状態で行われた引き取りのあとで「うん」受けが行われるケースが、少数だが存在するからである。これらのケースについては現時点では保留しておき、IV-2で触れる。

以上二つの一般化をまとめれば、本章では次のような傾向を見いだしたことになる。すなわち、「そう」受けは十分な発話産出を行わなかった者によって、「うん」受けは十分な発話産出を行った者によって用いられる場合がほとんどであるということである。

IV 責任主体の対照的割り当て：「そう」「うん」受けについての仮説

次に「そう」受け「うん」受けのあとで生じることに目を向けると、次のような傾向が見られる。「そう」受けを行っている者はそのあと引き続き発話を行う場合がほとんどだが、「うん」受けを行う者は続けて発話することが少ない。ただし、この傾向は数量的にそれほど圧倒的なものではなく、例外ケースも少なからず見られる。そこでわれわれは、次の手順で検討を進めよう。1では、まず、「そう」受けのあとで続けて発話が行われている多数派のケースを取り上げ、後続発話に共通した特徴を調べる。次いで、これらの作業を前章の作業と結びつけることで、「そう」受けについての仮説を提出する。2では、まず今の仮説と対比的に構成可能な「うん」受けについての仮説を提出し、そのあとで「うん」受けの諸ケースがこの仮説を支持するかどうかを、前章で積み残したケースも含めて検討する。

1 「そう」受けの仮説

まず、「そう」受けで後続発話が見られる大多数のケースでは、その後続発話は、引き取りが始まって以降に相手が行った発話の貢献を認めた形にデザインされる。これには3つ

のパターンがある。第一は、次のケースに見られるように、後続発話が相手の発話を踏まえた質問の形にデザインされる場合である。

【来る直前だもんね (Y I)】

→2 B: そうだって (.) あたしあれやったのさー (0.6)

⇒3 A: 来る直前だもんね

4 B: そうそうそう (0.7) このー (0.7) あと (0.4) ぐらい?

第二は、次のケースに見られるように、後続発話の前置きに順接の接続詞(「ほんでー」)を用いて、それが相手の発話を引き継ぐものであることが示される場合である。

【やっぱり思い描いてる (Y I)】

1 B: おっ (.) 男の人やから女性であろうとしたらー

→2 (0.4) 理想の女性像 (.) をー (0.6) [なんか (.) うう [そーそーそそ =
⇒3 A: hhhh [やっぱり (.) 思い描いてる [と思うわ頭ん中で

4 B: =そ ほんでー (.) でーそれに近づけていくからー

第三は、次のケースに見られるように、後続発話において自分の先行発話の言い換えが行われ、その言い換えが相手の発話の貢献を踏まえている場合である。Bの「えんどう豆のねー」という発話を「うんきせ」と引き取ったAは、「季節」という言葉を言いかけて中断したと見なせるが、このとき同時にBが発話した「出始め」という言葉は、より時期を特定するものである。そして、「一番おいしいときやった」という後続発話は、この相手の発話を踏まえたものと見なせる。

【うんきせ (SK)】

→9 B: ちょうどえんどうえんどう豆のねー [出始めでねー [うん
⇒10 A: うんきせ (.) そうそう [そう 一番おいしいとき

11 やったねー

この知見を前章で見いだした傾向と結びつけることで、われわれは「そう」受けについて次の仮説を提出できる。

(仮説2) 「そう」受けとは、自分の発話計画にとって、引き取り部分の相手の発話が独自の貢献をしたことを認定するために利用可能な手続きである。この手続きを用いることで、相手の発話は、「自分の計画に沿うものの自分では十分な形で言わなかったこと」の「代弁」として認定される。それゆえに「そう」受けは、相手の発話を自分の発話計画に組み入れる形でさらに発話を継続しようとするときに、その前置きとして利用できる。

言い換えるならば、大多数の「そう」受けにおいて指向されているのは、次のような参与役割の割り当て問題だと考えられる。ある発話計画を持った「責任主体」として会話に臨んでいる者が、その発話計画に見合う「著者+発声者」として十分にふるまえなかったとき、その間に行われた相手の発話を自分の発話計画との関係でモニターすることがレリ

ヴァントとなる。そして、その相手の発話が自分の発話計画に沿うものである場合、相手を「自分にとっての著者+発声者」として取り扱うことが可能となる。「そう」受けとは、このような形で相手の発話を取り扱うために利用できる手続きなのである。そしてそれによって、当人は相手の引き取り部分の発話に対して「責任主体」という立場を自ら選び取るのである。

次のケースは、一見したところこの仮説に反するように見えるが、そうではない⁴⁾。むしろそれは、参与役割の割り当て問題が別の形を取ったケースだと考えられる。

【なんかあったな (Y I)】

- 1 B: ああー (.) あ分かんなく [ても (0.5) [「はー」(.) (……ってから) =
 ⇒ 2 A: うん [なんかあったなって =
 3 B: [= (.) 「あーそーねー」(みたいな)
 4 A: [= おもうんだろう [(.) そうそう (.) 何かあるんかなって思うかもしれ =
 5 C: うんうんうん
 6 A: = ないけど (.) 基本的には分かんないわけじゃない

このケースでは、Aがオーヴァーラップした引き取り部分の発話を「そう」受け直後にリサイクルしていることから、AはBの発話を「組み入れる形でさらに発話を継続」しているのではなく、Bの発話を無視して自分の発話を完結させているように見える。しかし、上に述べたように、「そう」受けの多くのケースにおいては、それに先だって自分が「著者+発声者」として十分にふるまわなかったために、それを肩代わりするものであるかどうかという観点から相手の発話がモニターされるのだと考えられる。これに対し、このケースの場合、Aは「なんかあったなって思うんだろう」までを言葉探しも中断もなく発話できており、「著者」としては十分にふるまっている。不十分だったのは、この部分の全体がBの発話とオーヴァーラップしたこと、すなわち「発声者」としてのみである。Aにとってはここで、自分の発話計画の中に「発声者」を確保することが問題なのであって、相手を「著者」として利用することは必須ではない。そして、この問題はリサイクルすることで解決する。

ただ、この問題だけに対処するのであれば、Aは単にリサイクルだけをすればよいのであって、その前に「そう」受けする必要はない。ここで「そう」受けが行われているということは、Aが別のことにも指向していることを示している。Aはここで、リサイクルだけをすることでBのオーヴァーラップ部分をいわばノイズとして取り扱うのではなく、むしろBの発話もまた自分の発話計画に組み入れうるものであることを認定しているのだと思われる。オーヴァーラップ部分のBの発話は、話題になっている人物の様子を直接話法で「実演」するものであり、Aの発話はそれを「解説」するものである。二人の発話は、いわば「せりふ」と「ト書き」の関係にある。それゆえ、Bの発話はAの発話計画にとって単なるノイズではなく、むしろAの発話と相補的な関係にあるものとして利用可能である。このような意味において、ここでもやはりAはBの発話を特別な形で「組み入れる」ために「そう」受けを用いたのだと考えられる。

2 「うん」受けの仮説

「うん」受けでもっとも多いパターンは、オーヴァーラップした引き取り部分で自ら当

面の実際目的にとって十分な貢献を行っている者が、「うん」受けだけを行い、後続発話は行わない、というものである。つまり、この多数派のパターンは、前後のやりとりにおいて「そう」受けの大多数と対照的な性質を持っている。ここから、われわれは「うん」受けについて以下の仮説を暫定的に提出する。

(仮説3)「うん」受けとは、自分の発話計画にとって相手の引き取り部分の発話が独自の貢献はしていないことを主張しつつ、相手の発話の受け手としてふるまうために利用可能な手続きである。つまりこの手続きにより、相手の発話は、自分が十分な形で産出した発話への「相手の理解を示すもの」として「承認」される。

言い換えると、多くの場合、「うん」受けを行う者はそれに先だつて自ら十分な形で発話を産出しているから、オーバーラップした相手の発話を自分の発話計画との関係でモニターすることはレリヴァントにならない。ここでレリヴァントなのは、発話がオーバーラップしたという「発声者」としての不十分さだけである。そして先に述べたように、「うん」受けによってオーバーラップした発話の順序関係が整序されると考えれば、この不十分さも解決を与えられる。すると事態は、二人の別々の「話し手=責任主体+著者+発声者」がいるという、すっきりとしたものになる。「うん」受けとは、このようにして、引き取り部分でオーバーラップした相手の発話と自分の発話を、別々の二人の「話し手」に割り当てる手続きであると考えられる。

それでは、「うん」受けのあとで後続発話が見られる若干のケースは、この仮説と整合的に記述できるだろうか。それらの後続発話は3つの種類に分けられる。順に見ていこう。

第一に、「うん」受けに先立つオーバーラップした自分の発話が完了可能点に達していないときに、「うん」受けのあとでそれを完了可能点まで持っていく形で後続発話がなされる場合が3ケースある。

【イギリスロック (YS)】

- 4 B: ふーん (.) えっんじゃあイギリ (0.5) どっちかっていえば
- ⇒5 A: ┌ イギリスのー
- 6 ロックが好き └ イギリスロッ (.) うん (.)
- 7 B: うんあーあ (.) へえー

【こうやって見てる (YI)】

- 1 B: だから (0.3) 「あれっ」て感じでー (.) だから (0.5) よく考えたら (0.6) こたつとか
- 2 あったらー
- 3 A: うん (0.6)
- 4 B: テレビ見るにしても (.) こーうやって見てればうん (.) いいわけやけどー (0.3)
- ⇒5 A: ┌ こうやって見てるうん
- 6 B: あたしの場合寒いから (.) 布団に入って見ちゃうん └ やんかあ
- 7 C: └ うんうん

【戻るにしろ (YI)】

- 12 B: 東京まで出てー (0.6) 東京から戻るに
- ⇒13 A: ┌ しろ?
- └ 戻るにしろ (0.9)

14B: うん (0.5) すごい時間かかんねん

この3ケースにおいて、後続発話部分が先ほどの「そう」受けの場合とは性質が異なることを見て取れる。それらは発話デザインにおいて、「うん」受け前の相手の発話が独自の貢献をしたことを示してはならず、「うん」受け前の自分の発話を完了可能点まで持っていくものである。ここでは、「そう」受けにおいてみられたような意味で「相手の発話を組み入れる」ことは行われていない。むしろ、相手が自分の発話の途中までの部分に対して示した理解を承認したあとで、自分の発話を自分で完了させることが行われているのである。このような後続発話の性質は、まさに上の仮説を裏付けるものである。

第二に、「うん」受けに先立つオーバーラップした自分の発話が完了可能点まで発話されている場合にも、「うん」受けのあとでなお発話が行われるケースが3ケースある。

【食べちゃったねー (SK)】

→5B: 結局このトマトほとんど (0.4) ┌ 食べたねー うん (0.7) まるまる
└ 食べちゃったねー

⇒6A:

【あまい (YS)】

→1B: なんか (0.8) このパンの部分が (0.7)

⇒2A: あまい

3B: ┌ あまい

4A: うん (1.2) Aちゃんもっと辛い方が好き

【起こすからな (JM)】

1B: だーあれはな一体質 ┌ によってアレルギー反応＝

2D: └ しょっちゅう

→3B: =起こすねん

⇒4A: ┌ 起こすからな

5B: んー (.) だから大人でも死ぬ人は死ぬからな

これらのケースにおいても、後続発話部分のデザインにおいて、「うん」受け前の相手の発話が独自の貢献をするものとは扱われていない。先ほどの3ケースにも当てはまることだが、これらのケースにおいては引き取り部分で二人はほぼ同じことを発話しているため、発話計画を次のステップに進めるために「相手の発話を組み入れる」必要がそもそもないと考えられる。今の3ケースで行われている「うん」受けのあとの後続発話は、自分が十分な形で発話したことへの「付け足し」として行われていると見なせる。

しかし第三に、「うん」受けに先立つ引き取り部分で本人が十分な発話産出を行っておらず、相手のみがクリアな状態で発話しており、「うん」受けのあとで本人が後続発話を行っているケースが3ケースある。このパターンは、前章においても例外として保留されていたケースである。

【刺さってないかどうか (JM)】

→36B: うん (0.7) あとねえ (.) あのー (0.6) 針がー

⇒37A: 刺さってないかどうかですか?

38B: うん残ってるー (0.4) こうグッとこうかつ (.) 釘 (.) 鍵状になってるからー

【足下やからわからへんのか (JM)】

→1 B: K君の班やねんけどー (0.7) あのー (0.3) そのっ

⇒2 A: 足下やからわからへんのか

3 B: あれっ
「んーかもしれん (1.3) そのほんで (0.7) 足刺された子は黒い

4 ジャージや

【もう飯食い始めてる (JM)】

→1 B: 今もう (.) だいぶ (0.4) 中入って

⇒2 A: もう飯食い始めてる?

3 B: うん (.) あのー (.) まっあれやね (.) 配膳もほぼ

この3ケースは、「うん」受けに先立つ部分も「そう」受けのケースと共通の特徴を持ち、かつ、「うん」受けのあとで後続発話が行われている。しかし、これらの後続発話をよく見ると、そこでは引き取り部分の相手の発話に対して次のような操作が行われていることが分かる。

まず、【刺さってないかどうか】【もう飯食い始めてる】の場合、引き取り部分の発話によって相手が示した理解は誤っていることが、後続発話で示されている。前者の場合、Bが言おうとしたのは「針がささってないかどうか」という心配ではなく、「残っていないかどうか」という心配だったのである。また後者の場合、Bが言おうとしたのは「配膳がすんでいる」ということであって、「飯を食い始めている」ことではなかったのである。これらのケースにおいては、相手の発話には独自の貢献の可能性が含まれているものの、それらは否認されており、その否認の前置きに「うん」受けが用いられている。それゆえ、これら二つのケースにおいても、Aの発話が「組み入れ」られてはいない。

【足下やからわからへんのか】の場合は、一見したところ、仮説3への強力な反証に見える。後続発話には「ほんで」という順接の接続詞が用いられており、BはそれによってAの「足下やからわからへんのか」という推測に同意しつつ、次のステップに進んでいるように見えるからである。しかしながら、第一に、「ほんで」はAの発話に接続するものではなく、B自身の「かもしれん」に接続すると考えられる。Bはここで、Aの発話に直接順接する形で後続発話をデザインしているのではなく、一度「かもしれん」とそれを受けた後で、「そのほんで」と発話しているからである。第二に、BはAの推測に同意しているのではないと考えられる理由がある。「かもしれん」という発話デザインは、Aが明示的に述べたことを曖昧に肯定している点で、ポメラントツが「格下げ (downgrade)」と呼んだ手続きを構成する。ポメラントツによれば、格下げは内容的には同意を含んでいても、行為としては不同意であり、そのことはターン構成上の特徴に現れる [Pomerantz 1984]。

それゆえ、以上3ケースにおいても相手の発話が「組み入れ」られてはいないという点において、われわれは依然として「そう」受けのケースとの明白な差異を確認できる。しかしながら、仮説3は、「うん」受けによって相手の発話が「承認」されると述べていた

【行くねんなあ (ME)】

- 1 B: ほんでこっちの方のな (.) 近い方の門行かんなこっちのほうの (0.5)
 → 2 門までな—あ—んな
 ⇒ 3 A: 行くねんなあ
 4 B: 犬から (0.6)
 5 A: ほ—んと—
 6 B: からかうといふかなんか犬とな (0.4) なんか遊んでな

これらのケースでは、引き取り手の発話は誰によっても反応されておらず、引き取られ手はそれがなかったかのように自分の発話を継続している。前章の最後に見た「[うん] 受け+相手の理解の否認」という形式が、「うん」という形で相手の発話の受け手としてふるまい、かくして相手を「独立した話し手」として認定しているのに対し、ここではそのような認定がかけられている。

ここでも同様に、相互行為上「流産」する可能性は、引き取り手の発話にのみ存在するのではない。

【持つていくんやゆうてたね— (SK)】

- 1 B: 今度 (.) 今度これをね—
 2 C: ええっへっへっへ—
 → 3 B: んへへ—また秋んなったらね
 ⇒ 4 A: 持つていくんやゆうてたね—
 5 C: あっ (.) そ—ですか あそ—ですよ—あの庭に (.) 植えとけばね—
 6 B: 秋んなったらね— えへ
 7 B: ええ—これ—あの—
 8 C: 自分の家で食べられるぐらい出ますもんね—

このケースは共同説明であり、B=A夫妻の説明を来客であるCが受けている。このように第三者が受け手として存在する場合、引き取られ手の発話の方が「流産」する可能性が生じる。Aの「持つていくんやゆうてたね—」という引き取り発話は、引き取られ手B自身によっては上の2ケースと同様の扱いを受けている。しかし、受け手であるCがこのAの発話の受け手としてふるまう(5行目)ことにより、逆にBがリサイクルによって回復しようとした発話(6行目)の方が受け手を失っているのである。

2 相手を著者としてのみ利用すること

ところが、「うん」受けも「そう」受けも用いられていない場合でも、別の形で相手の発話の貢献を認めていると見なしうる手続きがある。それは、引き取られ手が引き取り後に相手の発話の一部を反復するという手続きである。いくつか例を挙げる。

【食べるし (YI)】

- 1 B: だってさ—
 ⇒ 2 A: 食べるし
 3 B: 食べてるときにね—

- 4 A : [2回うなづく]
 →5 B : いかにも
 ⇒6 C : ビー—
 7 B : ビシッとかしてたら (.) こわくない?

【なごりおしそうに (KS)】

- 1 B : だって思わずな
 ⇒2 A : なごりおしそうに
 3 B : なごりおしそうにあ—って
 4 C : あっはっはっはっはっは

【出てくると泣き出しちゃうん (SK)】

- 3 B : うん (0.5) 最初— (.) かえっ (0.7) 送ってって—
 4 A : うん (0.9)
 ⇒5 A : 出てくる と 泣きだしちゃうん? ふ—ん
 6 B : 出てくるとき必ず泣いたからね—

これらのケースは、引き取り手の発話を聞いたことを引き取られ手がマークしていないという点では、先ほどの「流産」のケースと同じである。しかしながら、引き取りのあとで相手の発話が反復されていることにより、それを「発話」としては受けていないが「言葉」としては採用していることが分かる。相手の発話を利用されている点は「そう」受けの場合と似ているが、異なるのは次の点である。「そう」受けの場合の後続発話は、相手の発話をそのまま「組み入れて」次のステップに進むものであるのに対し、ここでは相手の言葉をもう一度自分で言い直してから次に進んでいる。相手はいわば、せりふを忘れた俳優に舞台の袖から小声でせりふを教える者のように扱われているのであって、舞台の上のもう一人の俳優のように扱われていない。つまり、この手続きにおいては、相手は「発声者」であることを欠いた「単なる著者」として利用されているものと考えられる。ここでは、レビンソンが「ゴーストライター」[Levinson 1988] と呼んだ参与役割が相手に割り当てられているのである。

ただし、このような「著者」としての利用は、引き取られ手が単独で決定できるものではなく、やはり交渉の余地が存在する。引き取られ手によって「単なる著者」という地位を割り当てられた引き取り手は、それに対して「うん」受けをすることで、おのおの別々の「話し手」であることを示すという選択肢を持っている。次のケースは、この選択肢が用いられたケースである。

【なんとか法に (YS)】

- 3 B : なんか (.) 火器— (.) じゃない (.) あ—いうとこで火い使うと— (1.3)
 →4 あれじゃない? (0.5) あれしよ—消火— なんたら法に— 引っかかる
 ⇒5 A : なんとか法に うん

また、次のケースは同様のことをより強い仕方で行っていると見ることができよう。

【けっこうたいへん (Y I)】

→1 B: だからその前やから けっこーう たいへんだったと きじゃないかな
 ⇒2 A: けっこうたいへんで ったよね

また、相手を「著者」としてのみ利用することも、引き取られ手にのみ与えられた可能性ではない。以下のように、引き取り手がそのまま自らの単独のターン産出へと進む場合、引き取り手の方が引き取られ手を自分の発話計画の「著者」として利用していると考えることができる。

【ぜったいになんか (Y I)】

1B: とか (.) 何かあったやろうなっていうとき
 2A: うん
 →3B: ぜっ ったいに わかるもん
 ⇒4A: ったいになんか なんかね (.) 心がさー (1.0) こう (0.5) あるでしょ (0.5)
 5 こころへんで こういうふう に穏やかやねん (.) 結構
 6B: んー

VI 小括：引き取りにおける参与の交渉の装置系

以上にわれわれは、引き取りにおいて互いの参与役割が交渉される手続きを一通り概観した⁶⁾。これらの手続きは、次のような互いの出方に依存する一つの装置系として整理することができる。参与者たちは、これらの装置を用いることで、参与役割の配置転換を行う方法的基盤を持っているのである。なお、以下の整理においては、簡潔にするために、引き取りの開始が遅れる形式は除外しておく。

1) Bの発話をAが引き取り始めたとき、Bはその受け手としてふるまうことなく発話を継続する。この場合、Aの発話は相互行為上「なかったもの」となり、Aは「発声者」として認定されずに終わる。

→B: アイウエオ カキクケコ
 ⇒A: サシスセソ

2) Aが引き取り始めたとき、Bはそこで使われた言葉が自分の発話継続に利用可能であることを知り、それを続く自分の発話の中で反復して用いる。これによって、BはAを自分の発話計画の中で「著者」として利用するが、受け手としてはふるまわず「発声者」としては認定しない。

→B: アイウエオ カキクケコ
 ⇒A: カキクケコ

3) Bのこのふるまいを観察したAが、自分自身の貢献をやりとりの上で公然化させたいなら、「うん」受けをするという選択肢がある。これによってAは、自分の「カキクケ

コ」とBの「カキクケコ」のあいだに、二人の別々の「話し手」のあいだでの「提案-受諾」という関係を割り当てることができる。

→B: アイウエオ カキクケコ
 ⇒A: カキクケコ うん

4) もう一つの選択肢は、Aがここで十分な発話産出をしなかったときに、逆にBの方を自分の「代弁者」として利用することである。Aは「そう」受けをすることでこれを行える。

→B: アイウエオ カキクケコ
 ⇒A: カキク そう (+サシスセン)

5) Aが先に発話をやめずにオーバーラップした発話産出を続けた結果、Bの方が先に発話をやめた場合には、Bの方が「うん」受けにより「提案-受諾」という関係を作り出すことができる。

→B: アイウエオ カキクケコ うん
 ⇒A: カキ ク ケ コ

6) Bが上のような形でAを追いかけて自ら十分な発話産出することができなかつた場合、BはAの発話の貢献を認め、Aを「代弁者」として認定することができる。

→B: アイウエオ カキ そう (+サシスセン)
 ⇒A: カキクケコ

1章でわれわれは、引き取り手が「著者」「もう一人の責任主体」としてふるまう足がかりを作っている場合や、引き取られ手の発話に「著者性の緩み」がある場合に、引き取りが行われうることを見た。このようなりソースを用いて、聞き手は発話が「自分の参与に対して開かれている」ことを知り、ゆえに引き取りを「許容されうること」と見なすことができると考えられた。

2章以下ではこれを受けて、「許容されうること」が実際に許容されるのかどうか、またそれはいかんして行われるのかを見てきた。その結果見いだされたのは、引き取りにおいて生じるのは単に「引き取られ手が引き取り手の発話を承認/拒否する」という単純な事態ではないということである。むしろ、引き取り後の参与をめぐる交渉に含まれているのは、このような引き取られ手のイニシアティブの逆転をも含む参与役割の系統的配置転換の可能性なのである。

引き取りは、「一つの文を二人で産出する」という形でサックスによって表現されて以来、「共同話者性」を実現する形式として論じられることが多かった。しかしながら、上に整理したように、ここに出現するのは単に両者が「一つのパーティ」として協力するといった単純な事態ではない。一つの統語的単位が開放性を帯びることは、「文と同一視された発話」「発話を占有する話し手」といった統語的単位と発話と発話主体との自明視された

結びつきが、分解され交渉され再編される機会となる。このとき、統語的単位は「意図に賦活されたメッセージの乗り物」としてではなく、それ自体として相互行為の組織化の微細な媒体となる。このことは逆に、一人が一つの文＝発話を最後まで話すようなコミュニケーションのあり方が、それ自体一つの相互行為の組織化としてあることを照射している。

Ⅶ おわりに

本研究では、会話中に生じる引き取りという現象に焦点を当て、引き取りの契機と引き取りのあとで生じる参与をめぐる交渉を分析することにより、以下の諸点を明らかにしてきた。

第一に前稿では、引き取りの契機として、まづラーナーが指摘した予測可能性と進行性という二種類の契機が重要であることが再確認された。ただ、これらの契機をシーケンス環境の中に位置づけて検討する作業はいまだ十分に行われていないことから、本研究はこの点に焦点を当て、「理解の表示・チェック」「共同追加想起の促し」「現場コメント」「共通経験報告」「共同説明」「追加説明」という6種類のシーケンス環境を析出した。また、これらのシーケンス環境に共通の特徴を考える中で、引き取りという形式がアクセスの現在完了性を示す手続きであるという仮説を提示した。以上のような作業を通じて、統語的単位とはアプリオリに話し手の「占有物」であるのではなく、上のような契機の中でさまざまな形で「開放性」を帯びることを明らかにしてきた⁷⁾。

第二に本稿では、統語的単位の開放性は、参与役割論の視点を援用することでそのさまざまなあり方が識別でき、この視点から引き取り後の参与をめぐる交渉は、統語的単位への参与をめぐる交渉として記述できることを示してきた。参与をめぐる複雑な交渉をひとつひとつの参与者の手続きに即して記述し、引き取りのあとで用いられる「うん」「そう」という標識が持つ働きについてそれぞれ仮説を提示するとともに、それ以外の交渉の方法も含めた「参与の交渉の装置系」を明らかにした。また、これらの記述を通じて、引き取りという現象がデリダのいう「コンテキストの接ぎ木」の一例であるという主張に、参与役割の配置転換という形で具体的意味を与えた。

第三に、これらの作業を通じて本研究は次の理論的主張を行ってきた。引き取りという現象は、従来の語用論的枠組みとそれを支配しているコミュニケーションについての「伝達モデル」に限界があることを明らかにしている。この現象は会話の中にありふれているのであって、このような現象を視野に入れることのできないコミュニケーション論は不十分なものである。この不十分さは、従来の理論が「発話が伝達していること」のみに関心を集中させ、「発話が許容していること」というもう一つの重要な問題を等閑視していたことに由来する。それゆえ、引き取りのような現象をも視野に入れたコミュニケーションの理論を築くためには、統語的単位の「開放性」をその一部とするような「コミュニケーションにおける許容」という問題を視野に収めることが必要である。

本研究を結ぶにあたって、「コミュニケーションにおける許容」という問題を視野に収めることが、どのようなコミュニケーション論上の意義を持つかを素描しておく。

言語行為論、グライスの理論、関連性理論など「伝達モデル」と呼んできた諸理論は、いわば「送り手優位主義」に立っている。この見方からすると、コミュニケーションは、送り手が「意図」を持つことに始まり、その意図に賦活された送信行為が行われることで、それに動機づけられて受け手による解釈・推論過程が開始される。コミュニケーションの

「成功」とは基本的に送り手が「伝達しようと意図したこと」が受け手の側でできるだけ復元されることである。

これとは反対に、たとえばゴッフマンが描き出すコミュニケーションのあり方は「受け手優位主義」あるいはむしろ「読み手優位主義」といえるものである。この見方からすれば、コミュニケーションは受け手＝読み手が自分の関心に応じて外界をモニターすることに始まる。モニターする中で、他者の意図的なふるまいと意図を逃れたふるまいが見いだされる。両者のうち、意図的と見なされたふるまいはあまり重要ではない。なぜなら、意図的なふるまいは読み手を欺いている可能性があるからだ。このような見方を共有するもう一人の代表人物はフロイトである。患者の言葉を常に「心の検閲作業」を経たものとして捉え、患者が「伝えようとしていること」こそが真のメッセージに到達するための最大の障壁なのだと言及するとき、そこには「送り手の伝達意図」について伝達モデルとは対極的な捉え方が示されている。

もちろんここで、後者が論じているのは「コミュニケーション」ではないと考えて、それを議論から除外することも可能である。ただこのように並べることで、「伝達モデル」における「受け手」像がきわめて貧乏なものでしかないことが明らかである。そこで想定されているのは、送り手が「伝達しようと意図したこと」以上のことには関心がない人間像である。本研究が批判してきたのは、このような人間像に基づくコミュニケーション論の基本的限界であるということができる。ゴッフマンが時として例に挙げたような、観察されていることに気づいていない相手の挙動を一方的に読みとるような場合は除外するとしても、送り手が意図明示的に送信行為を行っているとき、受け手＝読み手の方も同時にさまざまな関心から送り手のふるまいをモニターしているというのが、私たちが日常出会うコミュニケーションの常態ではないだろうか。

「許容されうること」を視野に入れようとすることは、「送り手優位主義」に偏りがちであったこれまでのコミュニケーション論を「受け手優位主義」と出会わせることで、私たちの日常的なコミュニケーションの姿により適したコミュニケーション論を構築する足場となりうる。もちろん、受け手が「許容されうること」を見て取るにあたって、あるいはそれが続くやりとりの中でどのように交渉されるかに当たって、「送り手の意図」が一定の働きをすることは確かである。ここには考えるべき多くの重要な問題が横たわっている。しかし、それはもはや出発点にあってコミュニケーション過程を支配する中核ではないのである。

[トランスクリプトで用いた記号]

- (文字) : 聞き取りに確信が持てない部分
- (……) : 聞き取れない部分
- (数字) : 沈黙の秒数。ごく短い沈黙は (.) で示す。
- [: 同時発話の開始位置
- 文字h : 笑いながら発話された言葉
- hh : 吸気音
- ? : 直前部分の末尾が上昇調の韻律
- = : 行末から行頭への切れ目ない連続
- [文字] : 分析者による注釈

注

1) アンタキたちの主な知見は次のようなものである。1. 引き取られ手の発話はさまざまな参与役割においてなされるが、引き取り発話の参与役割が「忠実でない」ものとして拒否されるのは、引き取られ手が「通常の話し手」の参与役割で発話したときだけである。2. 拒否される時、引き取り発話は「引き取り手自身の発話」と見なされる。3. 参与役割が拒否される場合と、発話内容が拒否される場合とを区別できる [Antaki et al. 1996]。これらの知見は本稿の知見とも一部重なり、一定興味深いだが、彼らの記述の最大の問題点は、記述されている種々の参与役割やその承認／拒否が参与者自身の手続き的基盤に結びつけられていないことである。これは西阪によるレビンソン批判の要点であったが、同じ批判が彼らにも当てはまる [西阪 2001]。

2) 橋本による「汎人称発話」についての議論を参照した。たとえば「地球は丸い」という発話は、言語行為論で考えられているような「地球は丸いと私は言う」という潜在形式を持つのではなく、むしろ「地球は丸いと言われていると私は言う」というふうには、「私」以外のもう一つの人称が入った二重構造をなしていると考えられる。このため、「地球は丸い。しかし私はそれを信じない」という発言のセットは、ムーアの逆説のような逆説を必ずしも構成しないものと聞こえる。このような発話を橋本は「汎人称発話」と呼ぶ [橋元 1995]。つまり、この種の発話においては潜在的な主語である「私」と発話との距離が広がっており、「私」による「占有」がいわば「緩んで」いるのである。このような「緩み」は、会話の中では発話の予測可能性によってさまざまな形で生じうると考えられる。

3) C. パターンにおいては、定義上、クリアーな状態の引き取りは存在しない。しかしながら、引き取りの分析という枠組みを取り払って、「そう」受け一般について考えようと思えば、発話冒頭に用いられる「そう」はC. パターンにおけるクリアーな「そう」受けに相当する。以下の考察をこのパターンも視野に入れて拡張すれば、「そう」受け一般についての分析が可能であるが、それは本研究の範囲を超える。

4) このケースは、ジェファーソンが指摘した「最小限の受け手性の表示＋リサイクル」という形式に酷似している [Jefferson 1993]。ただ、ジェファーソンは「最小限の受け手性」の中身を詳しく検討していないので、直接の対比はできない。本稿の議論から推測できるのは、日本語の場合、「うん＋リサイクル」と「そう＋リサイクル」とでは行われていることが異なる可能性があることである。

5) ここでは詳しく扱えないが、「うん」と「そう」を組み合わせて用いる場合、「うんそう」という順序ではしばしば用いられるのに、「そううん」という順序ではまず用いられない。「うん」受けで行われていることを、承認／否認以前の「聞き留める」ことであると考えられることは、このような標識の組み合わせの問題を解明する上でも重要だと思われる。

6) 以上の整理には、なお一つのタイプが除外されている。それは、かつて私が「共同著作のユニゾン」と呼んだ形式を含む引き取りである。ここでは、引き取られ手と引き取り手は十全な意味で「共－話し手」として第三者に発話を向ける [串田 1997b]。

7) 本研究では統語的単位の「開放性」のみを扱ってきたが、会話の他のレベルの構造化についても「開放性」という問題を考えることはできる。たとえば、質問を向けられた相手以外の者がそれに応答することを可能にするようなアドレス形式についてのホルムズの仕事 [Holmes 1984]、物語りに関する聞き手たちの多様な参与の可能性を分析したC. グ

ッドウインの仕事 [C.Goodwin 1984, 1986], 1対1の口論が物語りに推移することで聴衆たちが口を出すことが可能になるというM. グッドウインの仕事 [M.Goodwin 1990]などは、シークエンス組織のレベルでの「開放性」に関わる仕事といえる。

[付記] 本稿の草稿に目を通していただいた高梨克也氏から、いくつもの有益なコメントをいただいた。記して感謝する。

参考文献

- C.Antaki, F.Diaz & A.F.Collins 1996, "Keeping your footing: Conversational completion in three-part sequences," *Journal of Pragmatics* 25: 151-171.
- M.バフチン 1988, 「ことばのジャンル」『ことば 対話 テキスト』新時代社.
- J.デリダ 1988, 「署名, 出来事, コンテキスト」『現代思想』16-6.
- F.Diaz, C.Antaki & A.F.Collins 1996, "Using completion to formulate a statement collectively," *Journal of Pragmatics* 26: 525-542.
- E.Goffman 1981, *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press.
- E.Goffman 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row.
- C.Goodwin 1984, "Notes on Story Structure and the Organization of Participation," J.M.Atkinson & J.Heritage op.cit.
- C.Goodwin 1986, "Audience Diversity, Participation and Interpretation," *Text* 6-3.
- M.H.Goodwin, 1990, *He-said-She-Said: Talk as Social Organization among Black Children*, Indiana University Press.
- P.グライス 1998, 『論理と会話』勁草書房.
- 橋元良明 1995, 「言語行為の構造」井上, 上野, 大澤, 見田, 吉見編『他者・関係・コミュニケーション』岩波書店.
- M.Hayashi 1997, "Where Grammar and Interaction Meet: A Study of Co-Participant Completion in Japanese Conversation," *Paper presented at Ethnomethodology and Conversation Analysis: East and West*, Waseda University.
- J.Heritage 1984, "A change-of-state token and aspects of its sequential placement," J.M.Atkinson & J.Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.
- D.Holmes 1984, "Explicit-Implicit Address," *Journal of Pragmatics* 8: 311-320.
- G.Jefferson 1973, "A case of precision timing in ordinary conversation: Overlapped tag-positioned address terms in closing sequences," *Semiotica* 9-1: 47-96.
- G.Jefferson 1984, "On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters," in J.M.Atkinson & J.Heritage op.cit.
- G.Jefferson 1993, "Caveat Speaker: Preliminary Notes on Recipient Topic-Shift Implicature," *Research on Language and Social Interaction*, 26-1.
- G.Jefferson 1978, "Sequential Aspects of Storytelling in Conversation," J.Schenkein (ed) *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, Academic Press.
- 人工知能学会談話・対話研究におけるコーパス利用研究グループ 2000, 「様々な応用研究に向けた談話タグ付き音声対話コーパス」『人工知能学会研究会資料』SIG-SLUD-9903-4.
- 串田秀也 1997a, 「会話のトピックはいかにしてつくられていくか」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社.
- 串田秀也 1997b, 「ユニゾンにおける伝達と交感: 会話における「著作権」の記述をめざして」谷泰編, 前掲書.
- 串田秀也 1999, 「助け船とお節介: 会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井・山田・西阪編『会話分析への招待』世界思想社.
- 串田秀也 2001, 「私はー私は連鎖: 経験の「分かち合い」と共一成員性の可視化」『社会学評論』206号.
- 串田秀也 2002, 「統語的単位の開放性と参与の組織化(1): 引き取りのシークエンス環境」『大阪教育大学紀要 第II部門』第50巻第2号.
- G.Lerner 1989, "Notes on Overlap Management in Conversation: The Case of Delayed Completion," *Western Journal of Speech Communication* 53: 167-177.
- G.Lerner 1991, "On the syntax of sentence-in-progress," *Language in Society* 20: 441-458.
- G.Lerner 1996, "On the 'semi-permeable' character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another participant," E.Ochs, E.A.Schegloff & S.A.Thompson (eds.) *Interaction and Grammar*, Cambridge University Press.

- G.Lerner & T.Takagi 1999, "On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: A co-investigation of English and Japanese grammatical practices," *Journal of Pragmatics* 31: 49-35.
- S.C.Levinson 1988, "Putting Linguistics on a Proper Footing: Explorations in Goffman's Concepts of Participation," P.Drew & A.Wooton (eds) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Polity Press.
- 水谷信子 1995, 「日本人とディベートー「共話」と対話ー」『日本語学』14.
- 水谷信子 1993, 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12.
- 西阪仰 2001, 『心と行為』岩波書店.
- 能川元一 1993, 「有意性理論における「合理的対話者」」『年報人間科学』14.
- 大澤真幸 1994, 『意味と他者性』勁草書房.
- J.L.オースティン 1978, 『言語と行為』大修館書店.
- A.Pomeranz 1984, "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes," J.M.Atkinson & J.Heritage op.cit.
- H.Sacks 1992, *Lectures on Conversation*, 2 vols., Blackwell.
- H.Sacks, E.A.Schegloff & G.Jefferson 1974, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language* 50.
- E.A.Schegloff 1972, "Notes on a Conversational Practice: Formulating Place" D.Sudnow (ed) *Studies in Social Interaction*, The Free Press.
- E.A.Schegloff 1987, "Recycled Turn Beginnings: A Precise Repair Mechanism in Conversation's Turn-Taking Organization," G.Button & J.R.E.Lee (eds.) *Talk and Social Organization*, Multilingual Matters.
- E.A.Schegloff, G.Jefferson & H.Sacks 1990, "The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation," G.Psathas (ed) *Interaction Competence*.
- J.R.サール 1986, 『言語行為』勁草書房.
- D.スベルベル & D.ウイilson 1993 『関連性理論』研究社出版.
- 高梨克也 1999, 「発話理解の推論モデルにとって発話行為論とは何か」『語用論研究』創刊号.
- E.バンヴェニスト 1983, 『一般言語学の諸問題』みすず書房.

The Semi-Permeability of Syntactic Units and the Organization of Participation (2)
—Devices for Allocating Footings in Collaborative Utterances—

KUSHIDA Shuya

*Course of Social Studies, Department of Education,
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan*

In this paper, systematic procedures are shown to be available to Japanese participants-in-collaboratives by which they can allocate different footings to themselves; 1) “so” reception is available to “adopt” another’s utterance as “speaking for me.” 2) “un” reception is available to “hear” another’s utterance as “showing understanding to my utterance.” 3) the repetition of another’s words is available to “borrow” them while making him/her a “ghost writer.”

In conclusion, the author argues 1) that an activity of co-producing a syntactic unit is a systematic opportunity to negotiate and change the formation of participation in conversation, 2) that a syntactic unit is not a “property” owned by a speaker but a common resource for participants to organize social interaction.

Key Words: conversation analysis, pragmatics, collaborative utterance, participation